

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

講演 「原子力エネルギーと被造物への責任

—キリスト教神学の立場から—

ヴォルフガング・リーネマン氏

スイス・ベルン大学隠退教授、関西学院大学神学部客員教授

二〇一一年一月二八日に、神学部とRCCの共催で学術講演会が開催された。スイス・ベルン大学神学部の隠退教授で、二〇一一年度秋学期に神学部客員教授としてお迎えしていたヴォルフガング・リーネマン教授によって、「原子力エネルギーと被造物への責任—キリスト教神学の立場から—」と題した講演がなされた。

もちろん、この講演は福島の原因事故を受けて行われたものであるが、リーネマン教授自身が原子力エネルギー問題に長年取り組んで来られた方である。リーネマン教授はキリスト教倫理学、平和学、ボンヘッフアーの著名な研究者であり、一九七〇年代にドイツのプロテスタント教会が運営する学際的な研究所FEESTにおいて研究員として働いておられた。このFEESTが、ドイツの中で広まっていた原発反対運動と、その運動に参加していた教会とキリ

スト者から要請を受けて、様々な学問分野から原子力エネルギー問題に対する答申を出した。その答申は、現代においても原子力エネルギー政策に取り組み基本的姿勢として継承されている。その答申の概略は以下の三点である。

- ①原子力エネルギーの利用は、経済的側面においても、安全面（特に事故やテロ）においても、環境保全の視点から言っても、非常に問題である。
- ②原子力エネルギーを用いなくとも、石炭などの化石燃料の燃料消費を徐々に削減する代替エネルギー政策がある。
- ③核廃棄物は最終的に数千年にも及ぶ想像を絶する期間にわたって貯蔵されなければならない。そこには解決されない様々な問題があり、それは持続性の要求と後の世代に対する配慮と相いれないものである。

これらの結論として、次のようなエネルギー政策に関わる基

本的姿勢が確立された。

再生可能なエネルギーへの転換をできるだけ早急を開始するために、これまで増大し続けて来たエネルギー消費を減速させること、さらにその最高限度を設け、徐々にエネルギー消費を減らすことが実現されなければならない。

リーネマン教授は講演において、「エネルギー政策は、持続可能な環境政策の鍵となる領域である。エネルギー政策にとつて、自然科学的・科学技術的問題だけが重要なのではなく、人間とその共生世界 (Mitwelt) がいかに適切で、互いに保全し合う関係を築いていけるかということが問われなければならない」ということを強調され、聖書から、人間は被造物に対して責任を負っており、その保全のために知恵と力をつくさなければならないことを訴えられた。

原発事故において、放射能の問題だけがクローズアップされるが、原子力エネルギーを必要としない社会の構築にも関心を寄せ、またその

実現に向けて政治的にも、経済的にも取り組んでいかなければならないことを気づかされた講演であった。

そして、この問題は単に福島だけの問題ではなく、日本全体の問題であると共に、世界規模の問題であることを認識し、そして他の諸国の人々との連帯を必要とするものであり、またそれが生み出される可能性が高いことを示唆された。

神の被造物である自然との共生を大切にするためには、人間同士が連帯し、共通に抱える問題に共に取り組んでいく必要がある。

なお、本講演の詳録は新教出版社の月刊誌『福音と世界』（二〇一二年二月号以降）に連載されているので、ご参照いただきたい。

（報告：RCC主任研究員 中道基夫）



講演会(二〇一二年一月十四日)

宗教は戦争の原因なのか？

写真家・ジャーナリスト 桃井 和馬氏

写真家としてこれまで戦場や紛争地を訪れてきましたが、今は自然、環境、地球のことをずっと追いつけています。それが私なりの平和構築の方法です。そういうことも含めながら、本当に民族や宗教が戦争の原因なのかということを考えていきたいと思っています。

一般に、民族と宗教が戦争の原因であると言われています。しかし、私が、訪問したアフリカや中南米の戦争・紛争地などでは、基本的に宗教や民族が本当の原因になっている戦争は見ることがありません。実際は別の原因があります。

去年九月に、日本の主張している海域に中国の船が入ってきました。この直後、中国の全土に反日運動が広がりました。その原因は尖閣諸島です。なぜ尖閣諸島がそんなに重要なのかというと、尖閣諸島の沖には天然

ガス田があるからです。これは完全に資源を巡る争いです。中国と日本との資源を巡る問題です。それがいつの間にか民族の争いになってしまった。ここが一番のキーポイントです。あらゆる戦争でこういうことが起こっているのです。

■領土、資源、食料、水

例えば第一次世界大戦の背景には、ヨーロッパ列強国による植民地政策があります。植民地を拡大していたイギリスと植民地政策に遅れて参入したドイツとの植民地に関わる争いが戦争の原因となりました。ドイツはベルリンからアジアに至る鉄道を敷こうとしました。イラクの先、そこには何かあるのでしょうか。大穀物地帯です。それと同時に綿花が重要な産業として栄えていました。つまりもしこの鉄道を敷かれてしまったら、

その先にある大量の資源、食料をドイツが独占的に手に入れることになってしまいうわけです。鉄道がイコール物資を運ぶための路線だったということです。

それに対して、もちろんイギリスが怒るわけです。第一次世界大戦は領土を巡る争いでした。領土はイコール食料提供を意味します。さらにそこには資源があります。その後起こる第二次世界大戦も、完全に領土そして資源を巡る戦いでした。

「ブラッドダイヤモンド」という映画があります。その背景である一九九一年から二〇〇二年までアフリカのシエラレオネという国で起きたシエラレオネ内戦では、誰彼かまわず手を切断するということが行われていました。すると人々はその様なことが行われる所から逃げだそうとします。そして大量の難民が発生しました。なぜ殺さなかつたかという点、手だけ切つて、残った足でこの土地から出ていってもらうためでした。その最終的な目的はこの土地にあるダイヤモンドを独占することでした。この内戦は民族紛争とい

うよりも、この土地で大量に採掘されるダイヤモンドの利権争いでした。

ルワンダでは一九九四年の四月から七月まで、一〇〇日間で大体八〇万人から一〇〇万人が殺害されたといわれています。

この紛争の原因は食料だと思いません。食料のもととなっているのは、健全な土地です。健全な土地というのは、木がたくさん生えている土地です。木が生えていることによって土壌が固定され、それによって肥沃な土地が担保されるわけです。ある特定の民族を殺害しなかったわけではない。その人たちが住んでいた土地を得たかったのです。そのような視点を持つと、民族の戦いというものがいかに違った原因で始まったのかがわかります。

領土、資源、食料に並ぶ重要な要素は水です。

世界水会議という国連の関連機関は、二〇五〇年までに大体世界の七割の人は水不足に悩まされ、それが紛争や戦争の原因になると警告しています。人間の体は七割が水できています。

水が無くなった時、次の瞬間から、当然人間は生きるために水の取り合いを始めます。相手の領土の中に入っていくこともありません。そういうことによって、当然紛争、戦争が起きると考えられています。

このように考えてきたときに、紛争や戦争の原因は、四つの要素にわかれていると思います。領土、資源、食料、水です。この四つは、実はすべて地球にあるもの、そして限りがあるものなのです。その一方で戦争の原因になるといわれている民族、宗教は、土を掘つて出てくるものではありません。それは私たちの頭の中にある概念でもあります。概念によって人は殺し合いをしません。戦争をするとき、武器をもってしている人たちというのは、大体皆、もともとはいいい人です。心の優しい人たちです。私たちが戦争はしないと知っているかもしれないが、状況が悪くなると、確実に戦争に加担する可能性を秘めていると私は思っています。普段は戦争をしたくないと思う人が戦争をするには、よほどの力が必要です。

そのパワーとなる原因は「自分や家族の肉体が生存できないかもしれない」という不安です。そのときに初めて人は武器を持ちます。

ただし、民族や宗教が全く関係ないというわけではありません。「火に油を注ぐ」という言葉があります。四つの要素、土地、資源、水、食料、すべて地球にあるもの、これが「火」です。そして「油」というのが、民族、宗教の要素です。

■自然破壊と戦争

一見民族紛争のようにみえる紛争も、その主たる理由は、鉱物を巡る争いであります。目に余る蛮行が行われている背景には、資源を誰が手に入れるのかという問題があるわけです。その犠牲者は人間だけではありません。マウンテンゴリラの居住区である密林に存在する資源を得るために、マウンテンゴリラは人間の手によって殺され、今絶滅の危機に瀕しています。

かつてエチオピアの七割は木に覆われていました。しかし戦争のときには木を植える暇がな

いのに、ただただ生活のために人々は木を伐り続けました。木がなくなってしまうと、人間は死んでしまうのです。理由は感染症です。燃料がないために汚い水をそのまま飲む。調理されていない食事をそのまま食べる。そうすると感染症で死んでいってしまいます。つまりきちんと恒常的に木を植え続けない

ので感染症で死ぬか、それとも戦争で死ぬかです。

■戦争を克服する

最後にパレスチナについて。パレスチナ問題は、宗教の問題だと言われています。しかしそれだけではない。イスラエルの周りには、エジプト、イラク、バビロニア、シリア、ヨーロッパという国々があります。中東



▲当日、450人の参加者が、熱心に聞き入った。

諸国の戦争にはイスラエルを通らなければなりません。そしてアジアの穀物、文化、香料を必要とするヨーロッパはイスラエルを通らなければなりません。この国々にとって、イスラエルというのは地政学的な要衝にあります。

一九四八年にイスラエルが建国される前は、アラブの人とユダヤ人はいっしょにいろいろなことをやっています。例えば結婚式にお互いが出席するという習慣もありました。つまり、長い間民族問題というのは、人を殺す原因ではなく、お

互いが隣同士に住む、そんな暮らしを続けてきたのです。だからいかに民族問題というものが他の要因によって作られているのかということが、この例からもわかります。

パレスチナの人たちとイスラエルの人たちをどうやって、戦争をさせないように和解させるのかということをやっているプロジェクトが日本にもあります。京都の日本国際民間協力会（NICCO）というNGOです。NICCOの人たちは考えました。パレスチナには二〇〇〇年前からオリーブの実がなっている木が残っています。だから伝統的に最高級のオリーブを作る素養があり、一方パレスチナ人は仕事がありません。だから、パレスチナの余っている土地にオリーブを植える仕事をしてもらうのはどうでしょう。だけど、彼らだけではだめなのです。実はイスラエルに住むユダヤ人というのはものすごく高いレベルの栽培技術を持っています。イスラエルというのは砂漠にありながら農業国

家です。品種改良によりどうやって砂漠で最高級のものを作るかという技術を持っているのがユダヤ人です。この二つの状況を合わせて最高級のオリーブオイルを作ろうというプロジェクトが立ち上がりました。しかし、最初からこのプロジェクトは躓きました。その二つの派が集まる会議をどこでもやらせてくれなかったのです。二つの勢力が集まって会議をすることなんて今までなかった。触れ合うことがなかったのです。しかし、ギリシヤ正教の神父様たちが住んでいる場所が、この会議の場所となりました。面白いですね。宗教というのは、お互いの違いを超えるためのキーワードになれるということが、この例からもわかります。

戦争を防ぐための方法には、いろいろあります。それを次の時代にむかって考えて欲しい。本場に何が戦争の原因なのかを見極めてほしい。地球を破壊してしまうと戦争が多発してしまうということも覚えておいてほしいと思います。

RCC 研究プロジェクト報告

■ミナト神戸に宗教多元主義を探索― △海のシルクロード△の文化と 宗教的共生

センター長 神田 健次

一昨年の四月より発足した共同研究のプロジェクト「ミナト神戸に宗教多元主義を探索―△海のシルクロード△の文化と宗教的共生」では、ミナト神戸における宗教の多元的状况、及びその背景にある多文化的コミュニティの歴史的展開を探りつつ、フィールドワークを中心として共同研究を推進してきた。

今年度は、今までに三回のフィールドワークを行ったが、第一回は、五月三日に北野神社で開催された国際まつりにおける「ピースセレモニー」に参加した。多様な宗教者による共同の平和の祈り「ピースセレモニー」は、注目すべき宗教間対話の試みであり、今回は特に、東日本大震災の犠牲者への追悼と被災地の復興のために他の宗教の代表と共同の祈りを捧げた。

第二回のフィールドワークでは、九月五日にカトリック鷹取教会、生田神社、日本基督教団神戸教会を訪れた。特に、カトリック鷹取教会で、小田武彦司祭より、阪神大震災後、教会が敷地内に鷹取コミュニティセンターを設け、多くのNGO、NPO、地域の方々が

集まり、多文化共生を目指して、幅広い活動を展開している話をうかがい、話し合った。

第三回のフィールドワークは、一月二四日に行われ、賀川記念館、立正佼成会神戸教会を訪れた。賀川記念館では、上内鏡子牧師により、一九〇九年に賀川豊彦が創始して以降の歴史と働きについて話をうかがい、また立正佼成会神戸教会では、一九五〇年に発足して以降の教会の歴史や、ボランティアの取り組み、地域の宗教者たちとの交流についてうかがった。その他、大学では二月二二日(木)に、神戸中華同文学校名誉校長の愛新翼氏の発題「華僑社会と宗教」を中心として研究会を開催した。

■自然の問題と聖典

センター副長 樋口 進

この研究プロジェクトは、二〇一一年度より始められた。以下に、今年度行われた研究会の簡単な報告をする。

第一回研究会…二〇一一年五月三十一日「旧約聖書における自然災害」樋口進 RCC 教授。ここでは、旧約聖書においてどのような自然災害が記されているかの概観がなされた。次に、自

然災害に遭った時の人々の反応、神の自然支配への信仰などについて述べられた。

第二回研究会(ミニフォーラム)…二〇一一年六月三日「わたしたちのいのちの源に目をむける―名古屋学院大学での実験動物感謝記念礼拝の取り組み」大宮有博名古屋学院大学准教授。ここでは、名古屋学院大学で行われている「実験動物感謝記念礼拝」についての取り組みの経過と姿勢について述べられた。

第三回研究会…二〇一一年一月一七日「神学の緑化」パウル・テイリツヒを手がかりに「近藤剛神戸国際大学准教授。ここでは、「神学の緑化」の状況を、何人かの学者の所論を紹介しつつ説明された後、パウル・テイリツヒの「エコ神学」について、自然の栄光・悲劇・救済という観点と、技術と経済に対する神学的検討という観点から論じられた。

第四回研究会…二〇一一年一月一七日「動物愛護観のダブルバインド―震災・事故における動物救援活動を例に」奥野卓司社会学部教授。ここではまず、人間と動物の関係の歴史と現状が述べられ、次に大震災・原発事故での動物救援活動の報告がなされた。そして、これらを踏まえて、未来に向けての、人間と動物の共有の可能性と課題が語られた。

なお、二〇一〇年度まで行われた「聖典と今日の課題」プロジェクトの成果は、二〇一一年九月に『聖典と現代社会の諸問題』として、キリスト新聞社から出版された。

■関西学院におけるキリスト教主義教育の展開

センター副長 山本 俊正

昨年度スタートした本研究プロジェクトは、関西学院が拡大を続ける中、現代において関西学院及び関西学院大学のキリスト教主義(教育)がどうあるべきなのか、またどのように展開されるべきなのかを模索し、検証し、具体的な提案を広く共有化することを目的に活動としている。本研究プロジェクトは、本学での豊かな伝統をふまえながら、二一世紀の大学としての新しい課題に応答するために、日本や海外におけるキリスト教主義(教育)のあり方をも参考にし、キリスト教主義教育の課題に本格的に取り組むことを意図している。

今年度(二〇一一年度)は東京にある四つのキリスト教(主義)学校を主任研究員が訪問して情報交換を行い、また、次の二つの公開研究会(うち一つは大学宗教主事会のFDを兼ねたもの)を開催した。

●第一回研究会
主題…『キリスト教と文化研究センター』開設の経緯をめぐって

講師…林 忠良 本学名誉教授
(RCC 初代センター長・前経済学部宗教主事)
日時…二〇一一年二月二三日(火)午後五時半より(約二時間)
場所…吉岡記念館三階 会議室一
参加者…二二名

●第二回研究会(大学宗教主事会 第一回FD)
主題…「主事の働きから」
講師…田淵 結(関西学院宗教総主事・教育学部宗教主事)
期日…二〇一二年一月二四日(火)
場所…吉岡記念館三階 会議室一
参加者…一八名

二〇一一年度はまた、先行研究とも言えるキリスト教主義教育に関するこれまでの成果について、各研究員が概観する作業を行った。関西学院と青山学院との共同で編纂された『キリスト教教育の理想と現実』(一九六八年)、また『キリスト教主義教育研究室紀要』等にも重要な論考が掲載されている。次年度も引き続きFDの一環として、各学部の宗教主事によるキリスト教及びチャペル活動を中心としたキリスト教主義教育の展開に関する発題報告を継続的に開催する予定である。

編集後記



東日本大震災から一年が経過しました。震災後、社会が軌道修正されたように思います。しかし、一体どこに向かっていくべきかを見定めるためには、一年というの

は短い時間です。旧約聖書でイスラエル人がエジプトを出てカナンの地に入るまでに四〇年かかったと書かれています。その四〇年間、神は民を見守り続けられました。RCCも研究・講演会を通じて、被災地と共に歩むべき先を共に考えていきたいと思います。(N)